

自律性療法とドイツ古典哲学

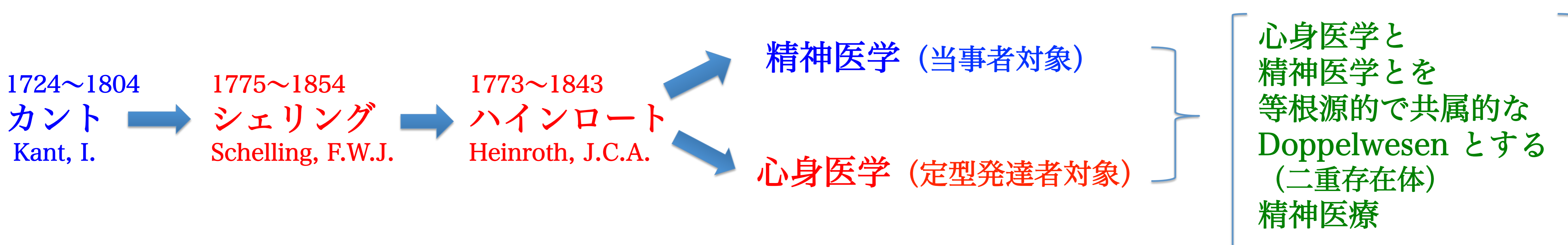
— 超越論哲学の方法としての自律性療法と中動態 —

濱田 覚（京都大学大学院）

1. 自律性療法とドイツ古典哲学

心身医学の歴史を辿ると世界初の精神医学の正教授ハインロート（Heinroth, J.C.A. 1773-1843）に行き着くが、ハインロートはドイツ古典哲学から多くの影響を受けていたことが知られている。特にドイツ・ロマン派医学を主導したシェリング（Schelling, F.W.J. 1775-1854）から多くを学んでいたことは最近の精神医学史研究が示している（Thiher, Allen, 1999, 174ff.; Bartlett, Steven James, 2005, 60; Roelcke, Volker. 1999,86）。

自律性療法では自律性言語化の展開が未開発であるが、ドイツ古典哲学の完成者とも見做されるシェリングの積極哲学に於ては自律性言語化の領域は（自律性黙想の受動的受容段階で得られる無意識からの応答の言語化を含む為）神話生成や宗教再生の現場であると見做し得る。その故にこの領域のさらなる展開には医学だけではなく（ハイデガー等の実存哲学やフッサール等の現象学の起源としての）ドイツ古典哲学の助けが必要だと考えられる。



2. 超越論哲学の方法としての自律性療法

ドイツ古典哲学の起源はカントの超越論哲学である。超越論哲学は超越論的反省によって認識の源泉を悟性と感性の二つに区別するが、超越論的反省の弁別によって悟性（可想界）と感性（可感界）だけではなく（この両極は再生的構想力（reproduktive Einbildungskraft）とは区別された産出的構想力が結合する理性の二源泉として捉えられていたが）、理論理性（Phänomenon＝現象の論理学＝構成原理≡心理）と実践理性（Noumenon＝仮象の論理学＝統制原理≡生理）の大きな裂け目（große Kluft）を残すことになった。我々は、カントが超越論哲学の方法とした超越論的反省を自律訓練法の言語公式によって獲得される自律性状態（能動的注意集中から受動的注意集中への移行を経た受動的受容において生起する脳制御的なダイナミズム）への反省（das Reflektieren）であると仮定したい。

通常の世界生活を営むにあたって必要な能動的注意集中状態と、自律訓練法の諸種の言語公式によって獲得される自律性状態とは、区別されると同時に、共存が困難な（しかし共在している）二つの異質な心理生理学的状態である。

カントにあっても悟性と感性、また理論理性と実践理性（カントは理性と称するが、むしろ生理的な意志）は、異質で両立困難な深淵を形成していると自覚され、この深淵を架橋する為にカントは『判断力批判』（1790年）において反省的判断力の自己自律（Heautonomie）原理を提唱した。自己自律原理の立法行為が理論理性と実践理性を架橋するとされるのであるが、自律性療法に於ける自律性言語化を、自己自律原理の立法行為（即ち自律性状態が持つ生理と心理を架橋する未発見の原理を言語化して措定する行為）の展開形態と仮定することで、自律性言語化の領域を開拓する可能性が開かれるのではないかという問いを提起したい。



3. 中動態（Medium）の文法

受動的注意集中から受動的受容へと移行する自律性状態では明らかとなってくる新たな内的世界を言語化する場合、能動態か受動態のみで文意を現わし、主語と客語のみから成る現存のいわゆる両肢言語（西欧言語など）では不便である。かといって能動態と受動態の区別を含めない（主語を必ずしも必要としない）単肢言語（日本語のように用言だけで文意が成立する言語）でもまた不十分であると思われる。能動態と受動態への分化を包摂しつつ、両肢言語のように行為的主体ではなく「出来事が生起している場所」を主題とする（古代言語のギリシア語やサンスクリットでは用いられていた）中動態の文法に着目することで、自律性言語化の技法とダイナミズムの新たな展開が期待される。その場合、両肢言語における能動態とは区別された、中動態と等根源的で共属的な現象として機能していた能動態に着目したい（國分 功一郎『精神看護』医学書院「中動態の世界（1）～（6）」2014年；森田 亜紀『芸術の中動態—受容/制作の基層—』萌書房、2013年 参照）。

